

グレーム・グリーン『熊は救われた』について

On Graham Greene's *The Bear Fell Free*

岩崎正也

Masaya Iwasaki

1

1935年、グレイソン社から出版された『熊は救われた』(*The Bear Fell Free*)は285部のうち署名と番号入りの250部が発売された。わずか18ページ、391行、33段落からなるこの短編は女の裏切りによるアントニー・ファレルの失敗の物語である。作品にはほぼ全編にわたって、段落ごとに主人公ファレルを始めとする複数の登場人物たちの記憶、感覚の細かな断片がファレルの意識、無意識を通して示されている。31段ではファレルの連想が、13行に及ぶジョイスの内的独白として表れている。

この生の断片を一枚の地図またはジグソー・パズルとして再構成することができれば、読者はファレルを通してグリーンに生に、あるいはグリーンランドに進入できるのではないか。グリーンは生の断片と全体像との関係について、『地図のない旅』(*Journey Without Maps*, 1936)のエピグラフの中で次のように述べている。

個人の生涯は多くの点で子どもが切り刻んだ地図に似ている。私は、もし最後まで知性を維持して100歳まで生きられるとすれば、その断片を結び合わせて適切な関連を持つ全体図にしあげることができるように思う。実際、他の人々と同じように少数の繋がった断片と、それ以上に多くの繋がっていない断片があるのに気がついているが、それらをいつかは適切に結びつけることができるだろう。これらの断章の多くは断片的なものに思われるが、いつかは全体像の必要な一部ということができるだろう。

2

物語を通過する時間も「子どもの切り刻んだ地図」と同様に何層にも断裁されているが、グウェン・R. ボードマンが示すように、段落ごとに時間の断片を過去(カーターが塹壕の中を死せる友を探して胸壁を乗り越える)、現在(ファレルの飛行前とその最中)、未来(ファレルの墜死後パロンとカーターが教会の入口にいる)の3層に分け、それに登場人物をはめこむなら、次のように考えてよいだろう(数字は段落)。

1	Farrell	Present	飛行中
2	Farrell	Present	飛行中
3	Farrell	Past	大西洋横断飛行を計画
4	Baron	Past	ファレルの記者による取材を予告
5	Farrell	Past	取材にたいするファレルの反発
6	Farrell	Present	宝鏡による金銭の無駄使いを非難
7	Baron	Past	
8	Farrell	Present	飛行風景
	Carter	Past	ファレルに友人として助言
9	Carter	Past	「天候よし、離陸せよ」と合図
10	Carter	Past	ファレルを激励
11	Farrell	Past	離陸直後野外大テントに衝突しそうになる
12	someone	Past	
13	Farrell	Past	パーティに招待された女たちの大騒ぎの食べっぷり

- 14 Carter Past バーでバロンにファレルの冒険心を賞賛
- 15 Farrell Present 離陸直後救命ベルトを機外へ捨てる
- 16 Baron Past ファレルの浪費を非難
- Farrell Past 雷雲接近
- 17 Farrell Present 嵐の中に突入
- 18 Baron Past パーティに来たことを後悔
- 19 Baron Past 酔いどれパーティに怒る
- 20 Carter Past ファレルの冒険心を賞賛
- 21 Carter Past 第一次大戦での勇敢なカーターの行為。バロン、選挙で最高得票を獲得
- 22 someone
- 23 Carter Future 戦没者記念礼拝に出席し、
Baron Future カーターはファレルの死を悼む
- 24 someone
- 25 Mrs. Farrell Past
- 26 Jane Future バロンの家においてカーターに電話
- 27 Farrell Future テディ熊がゆっくりと海水につかる
- 28 Farrell Present 海面に衝突
- 29 Carter Future 色あせたテディ熊を拾う
- 30 Jane Future
- 31 Farrell Past 内的独白としての会話の
Present 断片群
- 32 Farrell Future ファレルの死
- 33 Future テディ熊生還

段落ごとに表される時間層と人物の登場回数

	Past	Present	Future
Farrell	5	9	2
Carter	6	0	2
Baron	5	0	1

このようにして多数のイメージの断片を一枚の地図にしあげ同時に、時間を過去、現在、未来への順序に並べ替えたとき、ファレルの物語は次のように了解される。

ある地方のバブで買った宝箴に当たったファレルはその金を飛行機による大西洋横断に費やすことを思いつき、壮行会と言うべき、野外パーティを開く。シェリーに酔ったまま、彼は無謀な操縦

をして海面に衝突して即死、テディ熊は生還する。ガール・フレンドのジェーンは彼の友人のバロンと寝る。翌日、バロンは浴室で死ぬ。ジェーンはカーターからファレルの飛行機に乗せたテディ熊を返してくれと電話をする。

31段のファレルによる内的独白は句読点なしに13行に及ぶ。

All the voices all the time talking: indecent little respectable lost his way have a drink crazy about each other just by accident lost the way obviously lost the way fine young Farrel best friend a man ever O my God it's Davis glad you could come Mr. Baron kiss me Hardy fine young Conway best friend a man ever King will receive you dead in his bath members of the Book Society it will not be wanted these seven shall I go with you I will come with you duck fool duck reserve me a place on innumerable pieces, but no pieces ever mislaid, ... (省略)

この原文に句読点を補い、内的独白を書き替えると次のようになる。

All the voices all the time talking: such an indecent little respectable phrase book, lost his way, have a drink, we were crazy about each other, just by accident lost the way, obviously lost the way, it's fine of young Farrel, best friend a man ever, O my God, it's Davis, glad you could come, Mr. Baron, kiss me, Hardy, fine young Conway, best friend a man ever, King will receive you, dead in his bath, recommended for members of the Book Society, it will not be wanted these seven, shall I go with you, I will come will you, duck fool duck reserve me a place on innumerable pieces, but no pieces ever mislaid, ... (省略)

このように、indecent little respectableは24段から、have a drinkは26段のジェーンの言葉から、crazy about each otherも26段のジェーンの言葉から、fine young Farrellは4段のカーターの賞賛から、dead in his bathは27段から、members of the Book Societyは24段から、shall I go with youとI will come with youは22段から引用されている。

結末の33段の内省は当時グリーンが到達し得た二重意識を統合した視点から語られている。

生と死は同時に腐敗する。産科病棟での罪の意識と自殺、塹壕での罪の意識と自殺、ジェーンのアパートでの罪の意識と自殺。(中略)すべて起きてしまったことにたいする無意味な祈り、過去を持たない無意味な記憶、未来のない無意味な希望、終わりも始めもない無意味な愛。ティ熊は救われた。

3

作者が、「彼(=アントニー)は長兄ハーバートを理想化した人物だ」と言うふうに自伝『脱出路』(*Ways of Escape*, 1980)の中で述べているフェラントは苦痛、恐怖、絶望、汚辱など「成功」以外のすべての死の集合体を示し、ハーバートは「家族の者からどちらかといえば愛想づかしの憐れみをかけられた失敗者」であり、グリーンは30年代にイギリス社会の一つの特徴となった文化としての青春崇拜を信奉する「太陽の子たち」である。フェラントが「私と同世代にとってこの本に影を投げかけたイギリス国内の大恐慌と、ヒットラーの擡頭とのために暗雲のたちこめた中間期」の時代に置かれているように、グリーンは、第一次大戦後、父親の権威とイギリスの伝統が持つ「成熟」、「責任感」、「大人」という観念に反抗して自分たちの新しい男性的な生活様式を生み出そうとする若い世代の一員だった。

マーティン・グリーンはグレアム・グリーンについて「観念的には彼は太陽の子たちの並はずれた態度を回避した」が「つねに彼の傾向には太陽の子たちの要素があった」ことを指摘している。13歳のときからオックスフォード大学に入るまで6年にわたり、父である校長のいるパーカムステッド・スクールからも校長である父のいる家庭の校長公舎からも締め出された体験が特異な精神形成を少年期のグリーンに強いることになった。

1939年に出版された『掟なき道』(*The Lawless Roads*, 1939)のプロローグでグリーンは次のように語っている。

摩天楼、石段、朝早くから鳴るわれ鐘の音のす

る土地では恐怖、憎しみ、掟のないことに気がつくのだった。すさまじい残酷な行為が考え直すこともなく行われた、初めて大人も子どもも含めて本物の悪の性質を持つ人物に出会うのだった。コンパスで拷問をするコリファックスがいた。いかめしい三重の顎をもち、よごれたガウンを着て、悪魔的な好色さを見せるクランドン先生、こういう高い所から悪がパーロウの方へ降りてきた、彼の机にはつまらない写真——芸術写真の広告がいっぱいあった。彼らの幼年の中に地獄があった。

コリファックス、クランドン先生、パーロウが現実にだれか、その仮名と実名の関係についてノーマン・シェリーは綿密な考証を行い、解き明かしている。それによると、グリーンの「同年齢層にたいする忠誠心と父や兄にたいする忠誠心」の両者の葛藤を巧みに利用して精神的拷問のシステムを作り出したコリファックスは、グレアムよりわずか数か月早く生まれたに過ぎないライオネル・アーサー・カーター(Lionel Arthur Carter, 12 May 1904–17 May 1971)である。「一種の悪魔的な色欲の持ち主」のクランドン先生は『自伝』(*A Sort of Life*, 1971)に書かれている寮監のシンプソン博士である。

女の裸の写真を蒐集しているパーロウは、グリーンがオックスフォード在学中に書いた作品でタイプ原稿として現存する *Anthony Sant* (後に *Prologue to Pilgrimage* と改題)では Porter,『英国は私をつくった』の Gullie と名を変えているが、実際はセント・ジョン寮の監督生の Henslowe だったという。シェリーは『事件の核心』(*The Heart of the Matter*, 1951)の Scobie はグリーンがシエラ・レオネと一緒に勤めていた Brodie であることから、両者が同じ韻を踏んでいることに着目し、Parlow と Henslowe の同一性を指摘している。

ヘンズロウは航空機を対象とする優れたアマチュア画家で、卒業生によれば、「彼はいつもまわりに Spad, SE₂ とか他の描きにくい飛行機を描いてくれとせがむ大勢の後輩を集めていた」という。

また自伝に登場するグリーンを裏切ってカーターに加担した Watson は *Anthony Sant* では Hardy の名で登場するが、現実には Wheeler である。自

伝を発表した時期にはウィーラーはまだ健在だった。

コリファックスの実名カーターがグリーン著作の中でもっとも早く登場したのは『失われた幼年時代』(*The Lost Childhood and Other Essays*)が出版された1951年である。

あの現実世界ではヘンリー・カーティス卿のような人間になろうと夢見ても無駄だった。しかし何の得にもならない誠実さを棄て、友人を裏切って不名誉を浴びせられ、裏切りさえも果たせない者として死ぬことになったデラ・スカラ——彼の仮面の陰に隠れるほうが子供には易しかった。美男で忍耐強く悪の天才を持つヴィスコンティといえれば私は彼が防虫剤の匂いのするモーニングを着て何度も通るのを見たことがあった。その男の名がカーターである。

4

始めカーターはグリーンにたいして「コンパスで拷問を加えるコリファックスがいた」と記されているように身体的な攻撃をしかけたが、しだいにグリーンはカーターの拷問のシステムによって二種の忠誠心の境界に追いこまれた。シェリーは「グレムはクラスメートの中で自分の存在を示す何の策も持たなかった。彼に関するすべてがオストラシズムの原因であり、カーターにたいし攻撃の材料を与えた——その変わった外観と話し方、態度、運動競技や校内で最も賞賛される身体的技術の欠如」と記している。そのためグリーンはやがて登校拒否の症状に陥る。

後日、ロンドンのリッチモンドから精神分析の治療を受けて学校へ復帰したグリーンはそのときすでに友人を容易につくることができるようになったため、「カーターの支配は永遠に終り」自分が校内で「主流派にいる」ことを知った。

カーターはグリーンの中でさまざまな変型として登場する。『恐怖省』(*The Ministry of Fear*, 1943)のHilfeはアーサー・ロウにたいし、ねこがねずみを捕らえるときのような狡猾な策謀を行う点で「いじめのためにいじめを楽しんでいる」性格をカーターと共有している。パークムステディアン誌に寄稿された *The Poetry of Mod-*

ern Life は1921年5月、カーターの攻撃が一番激しい頃に発表されたもので、グリーンの間諜にたいするカーターの策略を扱っているという。

5

カーターは同期生によれば、「顔立ちがよく格好がよく、若々しくて見た感じは当たりさわりのない」人間だったという。

『熊は救われた』ではカーターはファラントの意識を通して、断片的に次のように想起こされる。

- (1) 冒険好きの第一次大戦の元英国空軍将校。
- (2) ファレルの飛行に先立ち友人として気象条件の調査からガソリンの調達まで一人でする。
- (3) 大西洋横断を企てるファレルの冒険を賞賛する。
- (4) 妥協のない忠誠心、保守的な慣行、同窓会を信奉する。
- (5) 塹壕の中を友人を探して胸壁を越える体験を持ち、塹壕での友情を信じる男。
- (6) ファレル墜死後、テディ熊を海から救いあげたとき、ファラントのガール・フレンドのジェーンから返してくれとせがまれる。

ジェーンはカーターに欲情をそそられたことをバロンに告白する。「あれはカーターよ。ねえ、パーティで会ったのを覚えているでしょ。もと将校の。ねえ、あの男が好きになっちゃった」。ボードマンは、「ブルー・フィルム」(*'The Blue Film'*, 1954)の主人公カーターが肩にあるあざのために妻に欲情を感じさせる人物であることを指摘している。その指摘はこちらのカーター対ジェーンの関係にも成立する。ジェーンはファレルを裏切るが、その裏切りの遠因は友人のカーターにある。テディ熊をファレルとジェーンに共通のイノセンスとすれば、熊が、再びジェーンに返されると予想されるため、ファレルはジェーンのイノセンスによって裏切られたと考えられないだろうか。作者は結末の救いの意味を曖昧にしているものの、この作品は以後作者が切り拓く女のイノセンスによる裏切り(たとえばイノセントなマリールによるケリーへの裏切り)という新たなテーマの開花を予感させている。

註 *The Bear Fell Free* の引用は1977年に出版の Norwood Editions による複製版から。

(1990. 6. 21 受理)